日本英文学会九州支部第 77 回大会

期日　2024 年（令和 6 年）
10 月 26 日（土）・27 日（日）

場所　福岡大学七隈キャンパス
（福岡市城南区七隈 **8** 丁目 **19** 番 **1** 号）

日本英文学会九州支部
〒890-0065 鹿児島市郡元一丁目 21 番 30 号
鹿児島大学法文学部
竹内勝徳研究室内
TEL (099) 285-8874
E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com
HP: http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp

2023-25 年度　日本英文学会　九州支部　理事一覧

秋好　礼子　（福岡大学）
井石　哲也　（福岡大学）
鵜飼　信光　（九州大学）
大島　由起子（福岡大学）
大橋　　浩　（九州大学）
加藤　洋介　（西南学院大学）
後藤　美映　（福岡教育大学）
小林　潤司　（鹿児島国際大学）
高野　泰志　（九州大学）
竹内　勝徳　（鹿児島大学）
西岡　宣明　（九州大学）
福田　稔　（宮崎公立大学）
前田　雅子　（九州大学）
松元　浩一　（長崎大学）
山田　英二　（福岡大学）

2024 年度　日本英文学会　九州支部　事務局員一覧

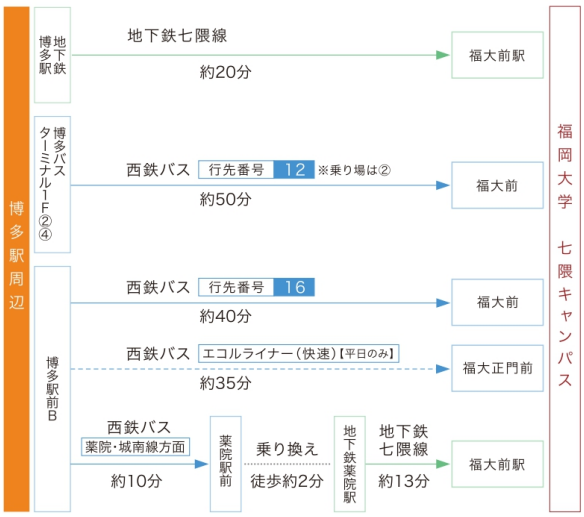
支部長・日本英文学会理事	竹内　勝徳
副支部長	小林　潤司
『九州英文学研究』編集委員長	後藤　美映
事務局長	大和　高行
書記	末松　信子
書記	小林　朋子
書記	松下　紗耶
書記	高根　広大

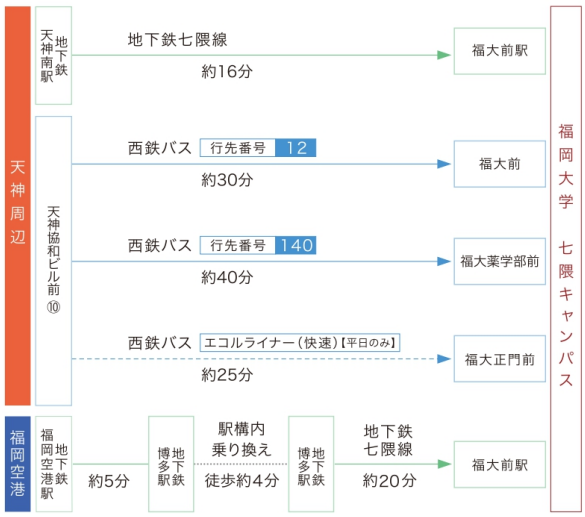
2024 年度　日本英文学会九州支部第 77 回大会　開催校委員一覧

鶴田 学（開催校責任者）、秋好 礼子、井石 哲也、大島 由起子、坂井 隆、
園田 暁子、高橋 美知子、竹安 大、福原 俊平、渡部 智也

福岡大学　アクセスマップ

〒814-0180 福岡市城南区七隈 8 丁目 19 番 1 号　　TEL 092-871-6631





※時間帯によって交通混雑が予想されますので、所要時間は目安としてください。
※バスの行先番号が同じでも行先が異なることがありますので、バス正面の行先（経由地）をご確認ください。
※公共交通機関の運行状況に変更が生じる場合があります。最新の情報については、以下ウェブサイト等からご確認ください。

●地下鉄に関する情報 …… 福岡市交通局 https://subway.city.fukuoka.lg.jp/
●バスに関する情報 …… 西鉄バス https://www.nishitetsu.jp/bus/

【高速道路】

唐津方面からの場合

西九州自動車道（福岡前原道路）から都市高速道路環状線に入ります。野芥ランプで降りた後、福大トンネル出入口の手前を右折し、梅林中学校入口を左折します。500mほど直進した後、福岡大学病院東口交差点を直進します。

北九州および福岡県外（大分・熊本方面など）からの場合

九州自動車道の太宰府IC（インターチェンジ）から都市高速道路に乗り、月隈JCT（ジャンクション）を左折します。堤ランプで降り、国道202号線（福岡外環状道路）を2kmほど直進して福大トンネル出入口手前から右折し、福岡大学病院東口交差点を右に入ります。

（ご注意）

＊ 車でお越しになる場合は、26 日（土）、27 日（日）ともに、正門から入って頂き、守衛の方に「英文学会九州支部大会関係者」とお声かけ下さい。駐車スペースが限られますので、できる限り公共交通機関のご利用をお願いいたします。

＊ 宿泊施設情報については、下記の日本英文学会九州支部のホームページをご覧ください。
http://kyushu-elsj.sakura.ne.jp （下記に QR コードを提示しています。）

日本英文学会九州支部ホームページ QR コード

開催期間中の食事と懇親会について

キャンパス内の食堂・売店・コンビニは 10 月 26 日（土）、27 日（日）ともに閉店しております。ご不便をおかけしますが、飲み物につきましては持参して頂くか学内の自動販売機をご利用下さい。27 日（日）の昼食はご準備いただくか、下記のフォームから事前にお弁当(お茶付 1,000 円（税込）)をご予約ください。また、26 日（土）18 時よりキャンパス内の学而会館 2 階の第 2 食堂にて懇親会（一般会員 5000 円、学生会員 3000 円）を開催いたします。その参加についても同じフォームから申し込みください。締め切りは 10 月 14 日とさせていただきます。
https://forms.gle/qnHwVCJZG8Nwqvnd6

26 日懇親会と 27 日の弁当の予約 QR コード

＊お弁当の代金と懇親会の会費は会場の受付（8 号館 2 階ホール）にてお支払いください。
お弁当については 27 日（日）12 時 20 分より同受付にてお渡しいたします。

福岡大学七隈キャンパスマップ

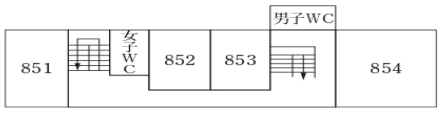
＊10 月 26 日（土）編集委員会、理事会・評議員会は、文系センター棟 15 階で開催いたします。15 階までエレベーターをご利用下さい。

＊学会は 8 号館 1 階・2 階の各教室で行います。

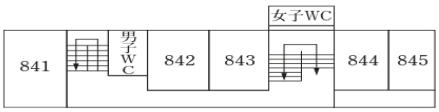
＊懇親会は通用門に近い位置にある学而会館 2 階の第 2 食堂で開催いたします。

会　場　案　内
（講義棟平面図）

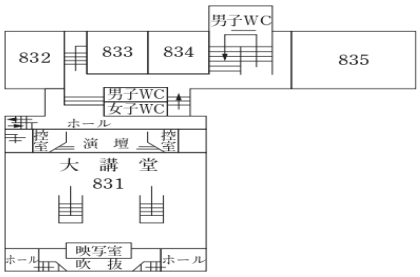
8 号館



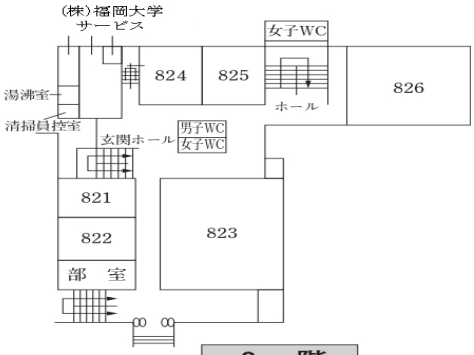
5　階



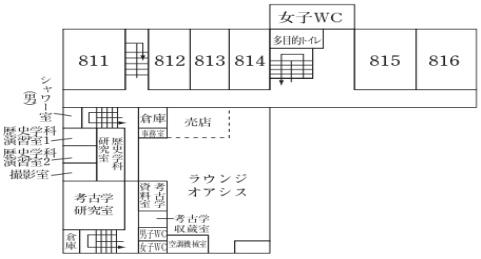
4　階



3　階



2　階



1　階

大会本部：811
編集委員会、理事会・評議員会：文系センター15 階 第５会議室
編集委員、理事・評議員控室：文系センター15 階 第６会議室
受付・書籍展示場：8 号館 2 階ホール
開会式・特別講演・閉会式：826 講義室
シンポジウム第 1 部門（イギリス文学）： 821 講義室
シンポジウム第 2 部門（アメリカ文学）： 822 講義室
シンポジウム第 3 部門（英語学）： 824 講義室
研究発表第 1 室（イギリス文学・アメリカ文学）：821 講義室
研究発表第 2 室（アメリカ文学）：822 講義室
研究発表第 3 室（英語学）：824 講義室
発表者・司会者・シンポジウム講師控室：813 講義室
一般会員控室：815 講義室

大　会　日　程

10 月　26 日（土）

開　会　式　　（13 時 10 分）　826 講義室

研　究　発　表（①13 時 30 分　②14 時 10 分）

第 1 室（イギリス文学・アメリカ文学）	821 講義室
第 2 室（アメリカ文学）	822 講義室
第 3 室（英　語　学）	824 講義室

シンポジウム（15 時～17 時 30 分）

第 1 部門（イギリス文学）	821 講義室
第 2 部門（アメリカ文学）	822 講義室
第 3 部門（英　語　学）	824 講義室

懇　親　会（18 時 00 分～20 時 00 分）（会費　5,000 円　学生　3,000 円）

---

10 月 27 日（日）

研　究　発　表（①11 時　②11 時 40 分）

第 1 室（イギリス文学・アメリカ文学）	821 講義室
第 2 室（アメリカ文学）	822 講義室
第 3 室（英　語　学）	824 講義室

特　別　講　演（13 時 30 分）	826 講義室
閉　会　式　　（15 時 00 分）	826 講義室

受付	8 号館 2 階ホール
研究発表者・司会者・シンポジウム講師控室	813 講義室
一般会員控室	815 講義室
書籍展示会場	8 号館 2 階ホール
大会本部	811 講義室

日本英文学会九州支部第 77 回大会プログラム

日　時：2024 年 10 月 26 日（土）・27 日（日）
場　所：福岡大学七隈キャンパス

第 1 日　10 月 26 日（土）
（受付は正午より、8 号館 2 階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式　13 時 10 分より（826 講義室）

	司会・鹿児島県立短期大学教授	小林　朋子
開会の辞	支部長・鹿児島大学教授	竹内　勝徳
開催校挨拶	福岡大学副学長	則松　彰文
開催校案内	福岡大学教授	鶴田　学
事務局報告	事務局長・鹿児島大学教授	大和　高行
優秀論文賞等選考報告	編集委員長・福岡教育大学教授	後藤　美映

研究発表（①13 時 30 分　②14 時 10 分）

第 1 室（821 講義室）

司会　福岡大学准教授　渡部智也
1.『大いなる遺産』において光がピップに見せる像――幻燈とジオラマの視覚効果
就実大学講師　原田昂

司会　琉球大学教授　喜納育江
2.　*Oceanstory* と *Gardens in the Dunes* における水
福岡大学大学院博士後期課程　大宅由加利

第 2 室（822 講義室）

司会　鹿児島県立短期大学教授　小林朋子
1.　おしゃべりな「食」―*Paradise* の「食」の表象にみる抑圧と解放
九州大学大学院博士後期課程　山口沙瑛

司会　熊本大学准教授　永尾悟
2.　“He Ought to Stay Away from Bitches”―*Light in August* における「黒さ」と「女性」の罪
熊本県立大学准教授　吉田希依

第 3 室（824 講義室）

司会　九州大学准教授　大塚知昇
1.　ECM 構文における随意的移動分析の再考
九州大学大学院博士後期課程　臼井悠香

司会　宮崎公立大学教授　福田稔
2.　話題卓越性と C/T の外的対併合　－ドイツ語とシンガポール英語における主文を中心に
西南学院大学大学院博士後期課程　若芝青

シンポジウム（15 時～17 時 30 分）

第 1 部門「イギリス文学」（821 講義室）
Joseph Conrad 没後 100 周年

司会・講師　熊本県立大学准教授　田中和也
講師　福岡女子大学教授　宮川美佐子
講師　長崎県立大学名誉教授　岩清水由美子
講師　東京大学名誉教授　柴田元幸

第 2 部門「アメリカ文学」（822 講義室）
ハーマン・メルヴィルと伝記研究

司会・講師　九州工業大学講師　鈴木一生
講師　明治学院大学講師　小椋道晃
講師　早稲田大学准教授　田ノ口正悟
講師　鹿児島大学教授　竹内勝徳

第 3 部門「英語学」（824 講義室）
主語の構造的位置を巡って

司会・講師　九州大学教授　西岡宣明
講師　九州大学准教授　前田雅子
講師　産業医科大学講師　下仮屋翔
講師　北九州市立大学教授　團迫雅彦

懇親会（18 時 00 分～20 時 00 分）
場所：学而会館 2 階の第 2 食堂　　（会費　5,000 円　学生　3,000 円）

第 2 日　10 月 27 日（日）
（受付は、8 号館 2 階ホールにて行います。受付では年会費の納入はできません。）

研究発表（①11 時　②11 時 40 分）

第 1 室（821 講義室）

司会　鹿児島国際大学教授　小林潤司
1. 『アントニーとクレオパトラ』における饗宴
（招待発表）筑紫女学園大学准教授　高森暁子

司会　鹿児島大学教授　竹内勝徳
2. トラウマからの脱出―コルソン・ホワイトヘッド『地下鉄道』のノマド的解釈―
（招待発表）九州工業大学講師　松田卓也

第 2 室（822 講義室）

司会　長崎大学教授　鈴木章能
1. Analysis of E. B. White’s Children’s Books
福岡大学大学院博士後期課程　Liu Jing

司会　北九州市立大学准教授　渡邊真理香
2. The Role of Native American Mythology in Children's Books of Louise Erdrich
福岡大学大学院博士後期課程　Liu Hui

第 3 室（824 講義室）

司会　長崎大学教授　松元浩一

1. 後期近代英語期における二重目的語構文の受動文の発達に関する再考

鹿児島大学大学院博士前期課程　上髙原健流

司会　熊本県立大学教授　村尾治彦

2. 等位接続と従属接続

（招待発表）福岡大学教授　古賀恵介

特別講演　13 時 30 分より　（826 講義室）

司会　鹿児島大学教授　竹内勝徳

移民・難民を語る現代アメリカ小説とその翻訳

東京大学准教授　藤井光

閉 会 式　15 時 00 分より　（826 講義室）

挨　　拶　　支部長・鹿児島大学教授　竹内勝徳

〈第 1 日〉10 月 26 日（土）

研　究　発　表

第　1　室（821 講義室）

司会　福岡大学准教授　渡部　智也

1.『大いなる遺産』において光がピップに見せる像――幻燈とジオラマの視覚効果

就実大学講師　原田　昂

『大いなる遺産』（*Great Expectations*）において主人公ピップ（Pip）は、まるで幻燈やジオラマを見ているかのような体験をする。これらは光を利用して絵を投影したり、動かしたりする技術だ。物語の中では、ピップが自身の人生に大きく影響する光景や人物を見る場合に、光に対する言及が見られる。例えば、彼が故郷を離れロンドンへ向かう際には霧が晴れ、光や反射を意味する語が別の意味で用いられる。また、彼の元を訪れる資金援助者の動きは、彼が持つランプの動きと連動する。さらに、ピップが実体のないものや自分の過去を見たかのように錯覚する際にも、やはりその場に何らかの光があることが示される。幽霊のようだと表現されるミス・ハヴィシャム（Miss Havisham）の姿は明かりで壁に映し出されるし、ピップが死を予感して走馬灯を見る際にも彼は明かりに照らされる。本発表は、これらの場面におけるピップの体験が幻燈やジオラマの効果と重ね合わせられることを分析する。

司会　琉球大学教授　喜納 育江

2. *Oceanstory* と *Gardens in the Dunes* における水

福岡大学大学院博士後期課程　大宅　由加利

北米先住民作家 Leslie Marmon Silko は、南西部の乾燥した地域で水の稀少性を理解し生きてきた先住民の生き延びを描くことが多い。この発表では、Silko の小説 *Gardens in the Dune*（1999）と e-novella である *Oceanstory*（2011）を取り上げる。*Oceanstory* の主要人物 X や *Gardens in the Dunes* の Edward のように利益を優先し先住民から搾取して自然破壊を進めた者は、命を奪われる展開になっている。一方、*Oceanstory* の語り手や *Gardens in the Dunes* の Indigo は、先住民の世界観を持ち、自然に敬意を払い自然を役立てようとするので、生き延びるように書き分けられている。彼女たちの水とのさまざまな向き合い方について、論じたい。利益を貪る者たちと、自然と共生する考えを持った者たちとを比較することによって、生き延びのための水を中心とした登場人物の自然のとらえ方を探る。

第　2　室（822 講義室）

司会　鹿児島県立短期大学教授　小林　朋子

1.　おしゃべりな「食」―*Paradise* の「食」の表象にみる抑圧と解放

九州大学大学院博士後期課程　山口　沙瑛

Toni Morrison の *Paradise* は、驚くほど多様な「食」の描写を含む作品である。舞台となる町ルビーの中心に置かれたオーブン、そこでの野営調理、女性たちの家庭料理、食材となる植物/動物、食を求める/拒絶する人々の感情/身体、など幅広い表現の可能性を持つ。「食」は、人の心身に対し大きな影響力を持つだけでなく、コミュニティの政治構造や経済活動を築き、維持する役割を担うため、人種、ジェンダーに関する社会的抑圧や対立構造とも結びついている。

しかし、その一方で、本作品における「食」は、そうした社会の問題点を伝え、そこからの解放を促す表現力や抑圧されてきた人々の独創性も生み出している。全てを完全に描くことなく、人種、ジェンダー、コミュニティなど様々な問題を伝えてきた Morrison の作品だからこそ、そうした「食」のあり様から「語り」のような役割を見出せるのではないだろうか。従って本論は *Paradise* に描かれた「食」の表象に着目し、作品の新たな一面の発見を試みる。

司会　熊本大学准教授　永尾　悟

2. “He Ought to Stay Away from Bitches” —*Light in August* における「黒さ」と「女性」の罪

熊本県立大学准教授　吉田　希依

William Faulkner の三大傑作の一つ、*Light in August*（1932）の中心にあるのは、自らの人種アイデンティティを決定できない Joe Christmas の悲劇であるが、すでに多くの批評家たちが、人種とジェンダーという二つのカテゴリーの密接な結びつきを論じてきた。特に、作品中で常に「黒さ」に「女性」的なイメージが付与されていることは明らかである。

しかしながら、作品の中で「女性性」にまとわりつく「黒」のイメージは、必ずしも文字通りの肌の色としての人種を意味するわけではなく、女性の “filth” =「穢れ」をも示していることには注意が必要だ。その意味において、“bitchery” =「不貞」の罪を犯す女性たちが、罪の証として「黒」のイメージを背負わされていることは納得がいく。つまるところ、すべての女性たちは穢れており、なおかつ「淫ら」な存在であるとされ、常に不貞をはたらく危険にさらされているのである。

本発表では *Light in August* における「黒」の表象に女性の「罪」を読み取ることで、Joe Christmas の極度な女性嫌悪の根源を再考しつつ、豊かに描かれる女性キャラクター達の抵抗の様を明らかにしたい。

第　3　室（824 講義室）

司会　九州大学准教授　大塚　知昇

1.　ECM 構文における随意的移動分析の再考

九州大学大学院博士後期課程　臼井　悠香

ECM 構文では、対格を付与される主語(対格主語)が補部節から主節へ移動するかどうかが随意的であると考えられてきた。(1)の副詞「愚かにも」は主節を修飾するが、これが対格主語に後続できる事実は、対格主語が主節へ移動することを示す。一方、(2)の副詞「まだ」は補部節を修飾するが、これが対格主語に先行できる事実は、対格主語が補部節にとどまることを示す。

(1)　山田は　田中を　愚かにも　天才　だ　と　思っていた。(Kuno (1976: 25))

(2)　ジョンが　まだ　メアリーを　子ども　だ　と　思った。(Hiraiwa (2001: 72))

英語でも、(3)の *make out* 構文において、対格主語が *out* に先行するか後続するかによって、照応形束縛の可否に差が生じる。

(3) a. The DA made the defendants out to be guilty during each other's trials.
b. ?* The DA made out the defendants to be guilty during each other's trials. (Lasnik 1999: 202)

本研究では、日本語と英語の ECM 構文における随意的移動分析を再考し、ラベリング理論(Chomsky (2013, 2015))の観点から、前者は移動が随意的である一方、後者は移動が義務的であることを示す。

司会　宮崎公立大学教授　福田　稔

2. 話題卓越性と C/T の外的対併合
－ドイツ語とシンガポール英語における主文を中心に

西南学院大学大学院博士後期課程　若芝　青

本発表では、話題卓越性を持つとされるドイツ語とシンガポール英語における主文の統語構造を、Chomsky (2013, 2015) のラベル理論の観点から再考する。ドイツ語は、主語卓越言語である英語と同じく φ 素性を持つが、主節に関しては話題卓越性を持つと言われている。ドイツ語の主文は文頭に第一要素として話題 (topic) として機能する要素が生起し、その後ろに第二要素として動詞が生起するという動詞第二位 (Verb Second: V2) 構造を取る。

本発表の提案として、話題卓越性を示すドイツ語の V2 やシンガポール英語の主文構造は、C と T が外的対併合した構造がデフォルトであるとする。この提案を基に、先行研究で議論されてきた、主語や目的語が文頭に生起する場合の構造や解釈上の差異について説明を試みる。さらに、この分析を口語シンガポール英語の主文にも拡張し、話題／主語卓越性という言語類型 (Li and Thompson (1976)) に、ラベル理論の観点から、どのような説明が与えられるのかについても議論する。

シンポジウム

第 1 部門「イギリス文学」(821 講義室)

Joseph Conrad 没後 100 周年

司会・講師　熊本県立大学准教授　田中　和也
講師　福岡女子大学教授　宮川　美佐子
講師　長崎県立大学名誉教授　岩清水　由美子
講師　東京大学名誉教授　柴田　元幸

Edward Said は *Culture and Imperialism*（1993）にて、文化の異種混交性（hybridity）を強調した。その訴えは、彼が元々専門としていて、なおかつその生涯と自分を同一視する向きさえあった、Joseph Conrad（1857-1924）の作品の核心と多面性を突いていると思われる。Conrad は祖国ポーランドを追われた故国喪失者であるが、イギリス小説の「偉大な伝統」の担い手と評価されて英文学史の一角を占めてきた。その一方で "Heart of Darkness" における人種表象が議論を巻き起こし、彼の作品は英文学というディシプリンの在り方に一石を投じる役割も果たしてきた。だが、このような「重々しい」評価の一方で、Conrad は幅広い読者層に親しまれ、なおかつ多様な批評理論で面白い読みが提供されてきた。現に Conrad は、英文学の先人たちの流れを組みつつ、アメリカ人作家の Fitzgerald、Hemingway、Faulkner たちに愛読され、ボルヘスや夏目漱石や村上春樹たちからも熱心に読まれてきた。いわば Conrad は英文学の流れを受け入れつつ、そこから支流も作った、「泉」のような作家だと言える。重々しさだけでは測りきれない、Conrad の多面性や面白さに、本シンポジウムは迫ってみたい。

街とその不確かな「音」

田中　和也

Conrad が *The Nigger of the 'Narcissus'*（1897）に付した序文は、彼の芸術家マニフェストと評されることが多い。そこでは、読者に作品世界を「見させる」こと（"To make you *see*"）が重視されている。このモットーからは、彼が親しんだ Dickens やフローベールなどのリアリズム小説の残響がうかがえる。だが、"Heart of Darkness"冒頭において、語り手の Marlow は物事の意味は木の実の「中」ではなくて「外」にあると見なしていると、彼の友人から評されている。ゆえに、Marlow の視点から「見」る内容や彼の視覚には限界があることが、暗示されているのである。実のところ Conrad 作品は、視覚の限界性に常に自意識的であったと考えられる。そこで本発表では、先の序文では副次的であるとさえ解釈できる、Conrad 作品の聴覚表現に着目したい。とりわけて、Conrad 作品の中でも都市が表象される中期の政治小説、なかでも *The Secret Agent*（1907）に力点を置きたい。この小説で、アナキストや政治活動家たちがかまびすしく語る一方で、自らの声で語りえない人々や語られない人々は、どのように描かれているのだろうか。

コンラッドと財宝

宮川　美佐子

探求は物語においてもっとも基本的な構造の一つと言える。金羊毛や聖杯などの神話や伝説では探求の果てに宝物の獲得があるが、その精神的な価値と物質性は一体化している。近代小説に到ると探求の対象はアイデンティティや真実などに重点が移行し、具体的なモノは探求の目的として一線から退く感がある。対してコンラッドの作品では、"Heart of Darkness"の象牙のように、抽象的な探求と背中合わせに財宝、とくに貴金属や鉱物が重要な存在として登場する。*Almayer's Folly* には黄金、*Lord Jim* にはジムが得たとされる財宝が現れ、*Nostromo* は銀が主人公とさえ言える小説である。こうした伝統的な意味での財宝の発見は 19 世紀末の冒険小説にも頻出するモチーフだが、これらの財宝は精神的な価値を体現していた伝説の宝物とは異なり、19 世紀末の社会における商品価値と絡み合っている。本発表ではコンラッド作品における財宝の特徴について考えてみたい。

コンラッドの小説におけるジェンダー表象―『チャンス』と『勝利』を中心に―

岩清水　由美子

海洋小説や政治小説で知られるコンラッドは、これまで女性に無関心な「男性的な」作家と見なされてきた。このような見方が優勢であったのは、小説の作風に加え、コンラッドが長い間海員生活をしていたということとも関係がある。しかしながら、いくつかの作品は、コンラッドがジェンダーの問題に関心があったことを示している。そしてこのことを最もはっきりと示していているのが、後期小説『チャンス』と『勝利』である。『チャンス』ではフローラの駆け落ち婚の顛末を描くことによって、『勝利』ではショーンバーグが男らしく生きようとする姿をコミカルに描くことによって、コンラッドはこの問題を提示している。本発表では、この二つの小説が書かれた時代の社会・文化的背景やコンラッドがおかれていた状況に目を向けながら、ジェンダーの問題がどのように表象されているのかについて見てみたい。

笑える作家、コンラッド

柴田　元幸

H. G. ウェルズは'One could always baffle Conrad by saying "humour." It was one of our damned English tricks he had never learned to tackle.'と述べたが、コンラッドの作品を何作か読んで漠然と感じ、*Lord Jim* と"The Secret Sharer"を訳してますます強く感じたのは、コンラッドがしばしば思わず笑ってしまうような文章を書くことであり、humour という呼び方が相応しいかどうかはともかく、たとえばウェルズよりよっぽど「笑える」作

家だということである。だがそう言って同意してもらえたことはあまりないので、この発表では「こんなに笑えます」という実例をまずはいくつか提示し、「笑い」の要素がコンラッドの作品においてどういう役を果たしているのか、あるいはいかなるより根本的な要素を反映しているのか、皆さんに考えていただくきっかけを提供できればと思う。

第 2 部門「アメリカ文学」(822 講義室)

ハーマン・メルヴィルと伝記研究

司会・講師　九州工業大学講師　鈴木　一生
講師　明治学院大学講師　小椋　道晃
講師　早稲田大学准教授　田ノ口　正悟
講師　鹿児島大学教授　竹内　勝徳

文学研究における自伝や伝記の立ち位置は、テクスト解釈から作家像を締め出した新批評主義の盛衰が示すよう、時に批評理論の流れさえも大きく変えてしまう。その作品のほとんどが自伝的である Herman Melville の場合、伝記的事実は作家によるテクスト自体と同等の重みを持つといっても過言ではない。その証拠に、メルヴィルの伝記を手掛けた者を挙げてみれば、すぐに思いつくだけでも、メルヴィル・リヴァイバルの嚆矢を放った Raymond Weaver を皮切りに、Newton Arvin、Leon Howard、Laurie Robertson-Lorant、Andrew Delbanco、Hershel Parker と、実に多彩な顔ぶれである。そこへ 2021 年、John Bryant が新たな選択肢として 2 巻組で計 2,000 ページ弱の（これから 3 巻目が出版される）*Herman Melville: A Half Known Life* を加えた。同書の新しさは、ブライアント自身による *The Fluid Text* (2002) の内容を、伝記執筆の場で実践してみせた点にある。そうした功績をメルヴィル伝記研究の豊かな土壌のなかで検討しつつ、伝記的・歴史的事実を美へ転化させる作家の、批評家の、あるいは社会の想像力について議論していきたい。

年齢のないメルヴィル、流動するテクスト

鈴木　一生

John Bryant の *Herman Melville: A Half Known Life* は、私たち読者が公共的遺産としてのテクストへ参加する契機を開いてくれる。テクストの流動性を前景化する同書では、創作過程で他者へ作品を明け渡すメルヴィルの姿が、おそらく意識的に描かれている。T・S・エリオット流にいえば、メルヴィルは閉じられた個から逃避し、個を超えた「伝統」、すなわち過去の偉大な精神を現在に生かし続ける歴史的な感覚へ向かっている。こうした他者に開かれた執筆スタイルが生み出す彼の作品の内側でも、ある出来事や人物を特定の時間に固定することなく常に運動として捉える文学的戦略——Evert Duyckink に宛てた手紙の表現を借りれば "The Art of rejuvenating old age in men, & oldageifying youth in books" ——が繰り返される。この戦略をテクストの精読と伝記的事実の検証から議論することで、作品内部、作者メルヴィルの人生、ブライアントによる伝記という 3 つの次元を貫く「テクストあるいは自己を外部へ開く方法」を明るみに出し、変容するモニュメントとしての文学作品の可能性について論じたい。

「伝記」作者としての Melville——*Israel Potter* におけるオーサーシップ

小椋　道晃

Israel Potter: His Fifty Years of Exile (1855) は、Melville が、独立戦争に従軍した一兵卒の自伝パンフレットをもとに物語化したものである。その序文で作家は、本作を"biography in its purer form"と規定することで始めているのだが、実際に、*Israel Potter* と 19 世紀中葉のアメリカにおいて一大ジャンルを成していた「伝記」とのかかわりについてはこれまでも指摘されてきた。そこでは Melville が Jared Sparks 編集の *Library of American Biography* シリーズに対する懐疑的な視点を提示していることに加え、ナショナリ

ズムに基づく合衆国の国家的キャラクターを構築する時代の風潮を批判する意図があったと理解されている。本発表は、作品のもつそのような批評的視座を踏まえつつも、あらためて、「より純粋な形式としての伝記」を強調する Melville の作家性を、その改稿作業や作品受容の観点を通じて検討する。最終的に、John Bryant が提示した、作家の主体を超えて流動するテクストのありようを浮かび上がらせたい。

Melville の南部――記憶の整理のための場所

田ノ口　正悟

John Bryant は *Herman Melville: A Half Known Life* (2021)のなかで、Melville 研究における伝記の重要性を次のように述べる。Melville は作中でさまざまな場所を描くが、それらは「混乱した記憶を圧縮された感情や思考、イメージへと変換する」ように機能している。伝記研究はそのような場所の分析を行い、「彼の人生と芸術のあいだの緊密な関係」を解明するために不可欠である。

このような考えに立脚しながら本発表で考察するのは、Melville のアメリカ南部表象についてである。南北戦争を題材とした *Battle-Pieces* (1866)はもちろんだが、そのほかにも初期作品の *Omoo* (1847)から代表的エッセイ“Hawthorne and His Mosses” (1850)を経由して最晩年の詩集 *Timoleon* (1891)に至るまで、キャリアの要所要所で Melville は南部を作品に登場させる。それは政治的あるいは哲学的メッセージを発するために用いられることもあれば、突如現れては読者に不思議な感覚のみを残して消えてゆくこともある。これまでの伝記研究を参照しながら Melville にとっての南部とは何だったのかについて考えることで、多くの先端的研究が乱立する分野における基礎研究の重要性を再認識する。

Herman Melville はどこに？――伝記を通した作家像の行方

竹内　勝徳

メルヴィルは手紙や日記など伝記的資料となりうる文書をあまり残していない。ノースウエスタン・ニューベリー版の全集に限ると、*Journals* が 1 冊、*Correspondence* が 1 冊だけである。それが彼の伝記の系統に表れているように思える。例えば、Hershel Parker による *Herman Melville: A Biography* (1996-2002)は、メルヴィル以外の家族や親戚、知人のコメントを幅広く利用し、客観的かつ立体的に彼の人生を描きだしている。一方、Laurie Robertson-Lorant の *Melville: A Biography* (1996)や John Bryant の *Herman Melville: A Half Known Life* (2021)は、彼の人生と作品世界を相互浸透的に繋ごうとしているように思える。本発表ではこれらの伝記の特質を明らかにすることで、メルヴィル読解の鍵を提示したい。

第 3 部門「英語学」(824 講義室)

主語の構造的位置を巡って

司会・講師　九州大学教授　西岡　宣明
講師　九州大学准教授　前田　雅子
講師　産業医科大学講師　下仮屋　翔
講師　北九州市立大学教授　團迫　雅彦

主語の構造的位置に関しては生成文法の理論的枠組みにおいて様々に論じられてきた。特に、動詞句内主語仮説（Kuroda (1988), Sportiche (1988), Koopman and Sportiche (1991)等）が提唱されて以来、主語の基底位置が動詞句内であることが広く受け入れられてきたが、顕在的な（派生）位置に関しては、言語、構文により様々な提案があるものの、いまだに解決されていない問題が多い。本シンポジウムは、日・英語を中心に主語の構造的位置をそれに伴うラベリングと格付与のメカニズムの観点から考察する。特に、Chomsky (2013, 2015)が提唱するラベリングアルゴリズム(LA)の予測に反すると思われる主語位置について格、省略、移動、節の定形性、方言データ、ならびに幼児の言語獲得に関する様々なデータに基づき考察し、主語の位

置を確定すると同時にその背後にある理論的根拠を探求する。

EPP と主語の位置

西岡　宣明

主語が TP 指定部にあることを要求する拡大投射原理（EPP)は生成文法において広く想定されている。それは、英語において以下のような意味的な要請がなくても虚辞主語がなければならないことを捉えるものである。

(1) a. *(It) rains.
　　b. *(There) appeared a dragon in the sky.
(2) a. 雨が降っている。
　　b. 空に竜が現れた。

ただ、(1)に対応する日本語(2)においては、虚辞の存在がなく、主語の位置は明らかではないため、EPP が働いているのかは明らかではない。

本発表では EPP の理論的位置づけと経験的問題を Chomsky (2013, 2015)のラベル（labeling)理論、ならびに Richards (2016)の隣接性（contiguity)の観点から考察する。特に、日本語における EPP の存在を反証し、その効果は日本語の談話特性に由来するものであることを論じる。

焦点化構文における動詞句削除

前田　雅子

英語における there 構文、場所句倒置文(Locative Inversion: LI)、引用倒置文(Quotative Inversion: QI)は、いずれも主動詞に主語が後続する焦点化構文であるが、それらの構文には主語位置に生じる要素について相違点がある。There 構文と LI では主語が vP 内に留まり、Spec, TP には、there 構文では there が、LI では非顕在的な虚辞が生じる（Postal 1977, Bruening 2010）。他方、QI では主語が Spec, TP に移動する(Bruening 2016)。本発表では、まず、これらの焦点化構文がどのように LA を満たしているかを明らかにする。さらに、there 構文は動詞句削除を許すが、LI と QI は許さないという事実について、その要因を考察する。特に、焦点要素の削除を許さないという談話制約や、Spec-Head Agreement の有無に基づく分析、LA に基づく分析では動詞句削除の可否の違いを説明できないことを示し、焦点化構文の動詞句削除には統語―音韻インターフェースにおける制限が関わることを明らかにする。

節と格

下仮屋　翔

英語において、典型的な定形節や不定詞節は格位置に生じないとされ、その対照性から動名詞節は異なる統語構造を備えるとしばしば根拠づけられてきた (cf. Pires (2006))。また同様の理由により、it 外置構文では定形節が容認されるものの動名詞節は容認されないとされる。その一方で、間接疑問の定形節は格位置に生起し、非顕在的主語の動名詞節は非格位置にも生起する。

本発表では、定形節・動名詞節の構造上の相違、またそれに依拠する格位置への生起可能性という観点からは一様に捉えることのできない上記の事例について原理的な説明を試みる。分析に際して、Ouali (2012)が提案する素性継承の可能性に照らして、Chomsky (2015)の Labeling Algorithm にもとづく節構造の派生を追求することにより、格位置/非格位置における分布を明らかにしていく。

幼児文法における主語の構造的位置

團迫　雅彦

日本語・英語の言語獲得研究では、主語の格標示について、(i) 獲得初期にはそもそも格標示がなされないこと、(ii) 大人の文法では誤用となる非主格標示で産出される場合があること、(iii) 時制の獲得によって主格標示が産出されるようになることが論じられてきた (Radford (1990), Murasugi (2020)など)。これらを主語の構造的位置という観点から再考すると、主格標示ができない段階では主語は TP 位置にはなく、一方で主格標示ができるようになると TP 指定部位置に存在することになると思われる。しかし、このような捉え方は言語発達を単純化することになり、幼児の文法の多様な側面を誤って評価している可能性があり十分とは言えない。本発表では、初期の主格標示の意味的特徴、主語の右方転移文、副詞と主語の相対的位置関係などから幼児文法における主語の構造的位置を捉え直すことで、ラベリングと格付与のメカニズムの解明に対して言語獲得研究から経験的・理論的に貢献することを目指す。

〈第 2 日〉10 月 27 日（日）

研　究　発　表

第　1　室（821 講義室）

司会　鹿児島国際大学教授　小林　潤司

1．『アントニーとクレオパトラ』における饗宴

（招待発表）筑紫女学園大学准教授　　高森　暁子

アントニーとクレオパトラの饗宴は、富と権力と魅惑と退廃の記号として、古代ローマの文献に登場して以来、様々な文学作品や絵画の中で描かれてきた。初期近代の英国では、それは贅沢と誇示的消費のストック・イメージとして、虚栄心を諫める文脈にも転用されていた。シェイクスピアの『アントニーとクレオパトラ』は、こうした饗宴の定番のイメージを超えた部分に焦点を当てる。ここでは饗宴は政治的なアイデンティティや価値観が投影される場であり、ローマとエジプトの文化的な差異や、シーザーとアントニーの権力闘争に関する言説の中で、力強いメッセージを喚起する。また、クレオパトラが劇中で魅力的な食べ物に喩えられることは、クレオパトラ自身と饗宴のイメージの一体化を促し、観客はクレオパトラという視覚的な饗宴について語る言葉を、耳で「食べる」会食者となるだろう。本発表では、こうした『アントニーとクレオパトラ』における饗宴の諸相について述べる。

司会　鹿児島大学教授　竹内　勝徳

2. トラウマからの脱出―コルソン・ホワイトヘッド『地下鉄道』のノマド的解釈―

（招待発表）九州工業大学講師　松田　卓也

ホワイトヘッドの『地下鉄道』(2016)は、逃亡奴隷の手助けをする者たちや逃亡路のネットワークのことを比喩的に指していた「地下鉄道」を、文字通りの鉄道として登場させ、それを使って逃亡する主人公コーラの足跡を追っている。本発表では、ドゥルーズとガタリによる「ノマド」思想を補助線として引きつつ、ホワイトヘッドの作品を考察する。西洋中心主義的と批判されることがしばしばあったドゥルーズらの思想であるが、近年はポストコロニアル文学やマイノリティ文学との関連から見直しが計られている。『地下鉄道』で描かれるコーラの逃亡劇には、ドゥルーズらが提唱したノマドや逃走線といった概念との親和性が確認で

きる。さらに、精神分析や資本主義に対するドゥルーズらの批判は、ホワイトヘッドの抑制された語りの作法や、レイシャル・キャピタリズムとしての奴隷制理解にも共鳴する部分があるように見える。ホワイトヘッドによる歴史小説の現代的意味を探りたい。

第　2　室（822 講義室）

司会　長崎大学教授　鈴木　章能

1.　Analysis of E. B. White's Children's Books

福岡大学大学院博士後期課程　Liu Jing

White is best known for his three children's books, *Stuart Little* (1945), *Charlotte's Web* (1952), and *The Trumpet of the Swan* (1970). These books are now considered classics. In *Stuart Little* Stuart is born to human parents, despite looking like a mouse and being two inches tall. Stuart is a picaresque hero, having a series of adventures in which he is brave, ingenious, enterprising, and romantic. In *Charlotte's Web* Wilbur is born as a runt pig, and the farm girl Fern persuades her father not to kill him. Later, with the help of his spider friend Charlotte, who writes about him in her web, Wilbur becomes famous so his life is saved again. In *The Trumpet of the Swan* Louis, a trumpet swan, is mute. Through the help of his father and his friend the boy Sam, plus his own efforts, he becomes able to communicate and live the life he wants.

In my presentation I will compare White's three children's books for the following features: first, the endings and themes of the stories; second, the female supporting characters; and third, the style of White's writing.

司会　北九州市立大学准教授　渡邉　真理香

2.　The Role of Native American Mythology in Children's Books of Louise Erdrich

福岡大学大学院博士後期課程　Liu Hui

Native American author Louise Erdrich has been writing for children her *Birchbark House* series, including *The Birchbark House* (1999), *The Game of Silence* (2005), *The Porcupine Year* (2008), *Chickadee* (2012), and *Makoons* (2016). In the series, Erdrich gives us a full look at nineteenth-century Native American daily life, culture, and myths.

Erdrich understands the complexity of human nature and American culture, including Native American culture, which means that she does not write characters who are all strong or all weak in the same way. In my presentation, then, I'm going to explain the varieties of strong women in *The Birchbark House* series.

My analysis of strong women in *The Birchbark House* series reveals the appreciation of women's power and strength in Native American and American culture, as well as the acceptance of having an "unusual" personality.

第　3　室（824 講義室）

司会　長崎大学教授　松元　浩一

1.　後期近代英語期における二重目的語構文の受動文の発達に関する再考

鹿児島大学大学院博士前期課程　上髙原　健流

二重目的語構文の受動文は，直接目的語を主語にとる直接受動文（'The book was given him'型），間接目的語を主語にとる間接受動文（'He was given this book'型），補部に前置詞句を伴う前置詞型受動文（'The book was

given to him'型）の 3 つに主に分類される。前置詞型受動文は古英語後期より頻繁に用いられ，一貫して他の形式より多く使用されている。直接受動文は古英語より用いられ，中英語までは間接受動文よりも多く用いられていたが，13 世紀から次第に間接受動文の使用が増え，1600 年頃には間接受動文の方が優勢となる。ただし目的語が 2 つの代名詞を伴う場合には 1500 年から 1700 年まで直接受動文が優勢であることがわかっている。本研究では，間接受動文が直接受動文を凌駕し，その使用が急激に拡大する時期にあたると考えられる後期近代英語期，特に 18 世紀，19 世紀のイギリス文学作品を対象に，前置詞型受動文，直接受動文，間接受動文の分布状況を調査し，動詞による違い，目的語の種類による違いを明らかにしながらその発達過程について考察する。

司会　熊本県立大学教授　村尾　治彦

2.　等位接続と従属接続

（招待発表）福岡大学教授　古賀　恵介

英語の接続詞には、等位接続詞と従属接続詞がある。例えば、同じ逆接関係であっても、(1)-(3)にあるように、等位接続詞 but でも従属接続詞 though でも表現することができるし、従属節が主節に対して前置されることもあれば、後置されることもある。

(1)　John is rich but he is unhappy.（等位接続詞 but）
(2)　Though John is rich, he is unhappy.（従属接続詞 though＋前置型）
(3)　John is unhappy though he is rich.（従属接続詞 though＋後置型）

従来からの見方では、これらの違いは、単に統語的従属関係の有無（並列関係か従属関係か）、及び副詞的要素の配置の問題（主節の前か後か）として、主に統語的な面から論じられてきた。

本発表では、文の発話内効力と文焦点という２つの概念を認知文法理論に組み込み、文の意味の主観性領域（事態の捉え方・伝え方）に目を向けることで、等位接続と従属接続の全体像と両者の違いを意味の面から総合的に説明できることを示す。（なお、従属接続詞の議論は、時間の関係上、副詞的接続詞に限定する。）

特　別　講　演（826 講義室）

司会　鹿児島大学教授　竹内　勝徳

演題　移民・難民を語る現代アメリカ小説とその翻訳

講師　東京大学准教授　藤井　光（ふじい　ひかる）

講演内容

本講演では、移民・難民を中心に展開する 21 世紀のアメリカ小説における主題と文体の特徴を、日本語への翻訳との関係から考察する。移民・難民は受入先の社会における各種のステレオタイプから無縁ではいられず、そのことは小説の設定にも戦略的に取り入れられる。たとえば Mohsin Hamid の *Exit West* (2017)や、Ling Ma の *Bliss Montage*（2022）での人物造形はそれぞれ、イスラーム圏の女性や中国からの移民女性に関するステレオタイプとどのように距離を設定するのかという問いを伴っており、それは翻訳にも大きく影響する問いである。

加えて、C Pam Zhang による *How Much of These Hills Is Gold* (2020)において、ジェンダーの問題は代名詞の使用のみにとどまらず、小説の文体それ自体に直結している。その問題は、英語内における中国語の多用がもたらす「翻訳効果」と相まって、移民・難民を語る際にどのような視点を読者に体験させるべきかという、多くの現代作家の模索にも接続されうる。2010 年代中盤以降の移民・難民をめぐる文学においては、作家自

身のルーツとなる地域あるいは移民となった出来事に直接的な関わりを持たず、地理的あるいは時間的に「隣接する」位置にある過去の出来事を小説の題材とするケースが顕著となりつつある。そうした主題面での変化が持ちうる意義についても取り上げたい。

講師紹介

北海道大学大学院文学研究科（博士前期・後期課程修了）、日本学術振興会特別研究員、同志社大学文学部英文学科教授を経て、現在は東京大学大学院人文社会系研究科准教授。専門はアメリカを含む現代英語圏小説の研究とその翻訳。

主著書：*Outside, America: The Temporal Turn in Contemporary American Fiction* (2013)、『ターミナルから荒れ地へ　「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』(2016)など。

主訳書：サルバドール・プラセンシア『紙の民』（2011 年）、アンソニー・ドーア『すべての見えない光』（2016 年）、モーシン・ハミッド『西への出口』（2019 年）、ニック・ドルナソ『サブリナ』（2019 年）、コルソン・ホワイトヘッド『ハーレム・シャッフル』（2023 年）など。